

京都会館に必要な舞台規模及び世界水準のオペラの考え方について

○ 必要な舞台規模（舞台奥行き：20m、舞台内高さ：27m）の考え方について

基本計画策定までの取組において、舞台芸術関係者や利用団体などにヒアリングやアンケートを行い、様々なジャンルごとで必要とされる舞台規模を検証した。オペラやバレエなどの総合舞台芸術は、その中で最も大きな規模が必要である。

① 舞台奥行きは、バレエの公演を行うプロモーター3団体からは、最低でも20mを要望されており、また、今回の再整備では、総合舞台芸術の公演の中でも海外からの引越し公演の受け入れも可能なホールとすることを目指しているため、海外からの引越し公演が実施されているホールと同程度の舞台奥行き20mは必要と判断した。

② 舞台内高さは、プロセニウム高さと同程度にあり、京都府合唱連盟のほか、ポップス等の音楽系のプロモーターからプロセニウム高さを12m以上確保してほしい旨の要望があったこと及び舞台の制作者から舞台セットを前面に組む場合や、高さを強調する演出を行う場合などにはプロセニウム高さが12m以上必要であるとの要望があったことから、プロセニウム高さを12mと設定した。

この場合、舞台内セットを確実に飛び切らせる*ためには、舞台内高さはプロセニウム高さの2.5倍の高さを確保することが理想（この場合は概ね30m）とされている。

しかしながら、オーケストラピットを使用する場合は、客席は舞台先端から約6m程度後退すること、また、演出上必ずしも12mの高さを必要としないこともあることから、舞台内高さは東京文化会館・大ホールと同等の27mあれば対応可能と判断した。

* 舞台の幕などを観客席から見えない位置まで引き上げること。

○ 「世界水準のオペラ」の定義について

海外ではミラノ・スカラ座、英国ロイヤルオペラ、フィレンツェ歌劇場、メトロポリタンオペラ、ベルリン歌劇場、パリ・オペラ座及びウィーン国立歌劇場など、歌劇場自らが制作を行い、海外から招聘され、引越し公演を行っているオペラを想定。

国内では新国立劇場制作のオペラのように恒常的に自主制作され、公演を行っているオペラを世界水準と考えている。